



TITLE:

我戦時利得税ヲ論ス(二、完)

AUTHOR(S):

小川, 郷太郎

CITATION:

小川, 郷太郎. 我戦時利得税ヲ論ス(二、完). 經濟論叢 1918, 7(3): 313-331

ISSUE DATE:

1918-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/127433>

RIGHT:

我戰時利得稅ヲ論ス（二、完）

小川 郷太郎

前號ニ緒言―戰時利得稅ノ本質―納稅義務者―

本號ニ戰時利得ノ算定并ニ課稅範圍―免稅點―稅率―戰時利得稅法ノ施行期間―結論

第四 戰時利得ノ算定并ニ其課稅範圍

一、法人利得ノ算定。

戰時利得ハ既ニ述ヘタル理由ニ依リ戰時所得ヨリ平時所得ヲ控除シテ之ヲ計算ス、法人ニアリテハ其平時所得ハ大正二年七月三十一日以前二年內ニ終了シタル各事業年度ニ於テ既ニ決定セラレタル所得金額ヲ平均スルニ依テ之ヲ得、其戰時所得ハ所得稅法ノ規定ニ從テ之ヲ決定ス、是ガ故ニ法人利得ノ計算ハ普通ノ場合ニハ簡單明瞭ニシテ何等難問題ヲ生スルコトナシ、唯平時ト戰時トノ間ニ所得ノ因テ生スル基礎ニ變化ヲ生スルカ又ハ所得關係ニ激變ヲ生スル場合ニハ戰時所得ヨリ控除スベキ平時所得ニ斟酌ヲ加ヘサルベカラズ、是ニ於テ所謂假想的平時所得ノ推定ヲナスノ必要ヲ生ス、我戰時利得稅法ハ此場合ニ資本ヲ取り來リ之ニ對スル一定ノ收益率ヲ以テ假想

の平時所得トス茲ニ問題トナルハ収益率ノ定メ方ト資本ノ計算方法ナリトス、此二者ニシテ宜キヲ得ズンバ戰時利得ノ計算當ヲ失シ課税ハ不公平ナルモノトナリ了ラン、

一、収益率ノ定メ方ニ就テハ法人ノ假想的平時所得ヲ推定スル場合ヲ區別シテ之ヲ觀察セサルベカラズ、我法ニ依レハ法人ノ假想的平時所得ヲ推定スル場合三アリ、開戦後ニ法人ノ成立スル場合、平時ニ成立セル法人ニシテ其所得絶無ナルカ若クハ過少ナル場合、平時ニ成立セル法人ニシテ開戦後ニ増減資ヲ行ヘル場合はナリ、我法ハ前二ノ場合ニ於テ資本ニ對スル一割ノ金額ヲ以テ平時所得ト推定シ、第三ノ場合ニ於テハ平時ノ資本収益率ヲ戰時資本ニ乗シタルモノヲ以テ平時所得ト推定ス、姑ク前二場合ノ計算方法ヲ法定収益率主義ト云ヒ最後ノ場合ノ計算方法ヲ平時[。]收益率主義ト名ケン。平時収益率主義ハ第一并ニ第二ノ場合ニ之ヲ適用スルコト能ハサルガ、法定収益率主義ハ啻ニ第一第二ノ場合ニ適用スルコトヲ得ルノミナラズ、第三ノ場合ニモ亦之ヲ適用スルコトヲ得ベシ、現ニ此主義ニ依レル立法例ナキニアラズ、英國ノ如キ是ナリ、蓋シ既ニ戰前未成立ノ法人并ニ平時所得ノ絶無若クハ過少ナル法人ニ對シ法定収益率主義ニ依テ平時所得ヲ算スル以上ハ資本ノ増減ヲ行ヘル法人ニ對シテモ同一主義ニ依テ平時所得ヲ算スルコト敢テ不當トスベカラズ、現ニ増減資ヲ行ヘル場合ニ於テモ平時所得ノ絶無若クハ一割未滿ナルトキハ平時[。]収益率主義ヲ捨テ、法定収益率主義ヲ採用スルニアラズヤ、(五條二項三號末段)獨リ平時収益率ガ一

割ヲ超ユル場合ニノミ法定收益率主義ヲ捨テ平時收益率主義ヲ採ルノ理由アルナシ、更ニ進テ平時收益率一割以上ヲ有スル法人ガ増資ヲ爲ス場合ニ就テ考フルニ、其増資ニ對シテモ高キ平時收益率ニ依テ平時所得ヲ算スルルガ故ニ、戰時所得ハ大ナルモ、平時所得ヲ超過スルコト少クナリテ戰時利得稅ヲ逋脱スルコトナラン殊ニ戰前比較的小資本ヲ以テ比較の大ナル收益ヲ舉ゲシ會社ガ増資スル場合ニ於テ然リトス、逋税ノ目的ノ爲ニスル増資ハ斷ジテ之ヲ避ケサルベカラサルニ、法ハ却テ之ヲ獎勵ス、不當モ亦甚シト謂フベシ。

次ニ又開戰後ノ増資ト新會社ノ設立トヲ對照スルニ、既設會社ト新會社トノ差、ソアレ、資本ヲ新ニ事業ニ投下スルニ至ラハ一ナリ、然ルニ法ハ新會社ノ所得ヨリ控除スベキ假想的平時所得ハ資本金ノ一割トシ、舊會社ノ所得ヨリ控除スベキ増資ニ對スル假想的平時所得ハ一割以上トスル也(平時收益率一割以上ノモノニ就テ云フ)其結果ハ新會社資本ニ重ク稅シ戰前利益多カリシ舊會社ノ新資本ニ輕ク稅スルコトナルベシ、兩者ノ間ニ於ケル不公平ハ到底之ヲ免ルルコト能ハサル也。

増資ニ依テ脫稅ヲ計ル虞ナキカト云フコトニ就テハ、議會ニ於テモ屢々詰問トナリテ現ハレシガ、政府委員ハ之ニ答ヘテ曰ヘリ。^{**}

増資ガ積立金ノ繰替充當ニ依テ行ハルル場合ハ資本金額ニ於テ異動ナケレハ、脫稅トナラズ、増資ガ株主ノ拂込ニ依テ行ハル

* 貴族院酒造稅法中改正法律案外四件特別委員會議事登記錄第三號田中源太郎氏質問二九頁

** 同上 三一頁 三四頁

ル場合ハ其會社ニ於テ相當ノ利益アルガ爲メト認メサルベカラズ、利益ナキニ拂込ヲ爲シムベキ理由ナシ、此クシテ増加セラレタル資本ハ運轉セラレ相當ノ利益ヲ收ム、其利益ハ從來ノ率位ノモノヲ推定スルヲ當然トス、平時ノ割合以上アリタル場合ニ初テ戰時利得稅ヲ課スベキノミ脱稅ノ虞ナシト。

然レトモ開戰後ノ増資ナルモノハ常ニ必ズシモ相當ノ利益ヲ收ムベキ事業ニ放下スルカ爲メニ行ハルルモノト謂フベカラズ、「プレミアム」ヲ得ンカ爲メニ、又ハ株主ノ歡心ヲ買ハンカ爲ニ行ハルルモノ亦決シテ少カラサルナリ、政府委員ノ説明ノ如キハ今日實業界ノ實狀ヲ洞察シタルモノト云フベカラズ、更ニ戰時利得稅法ノ成ルヤ、之カ脱稅ヲ計ランカ爲ニ増資ノ行ハルコトアルヲ豫期セサルベカラズ、要之増資ノ場合ニ於テモ法定收益率主義ヲ採ルヲ穩當トスベシ。

以上ハ資本ニ増減アル場合ニ就テ論セルモノナルガ、開戰後ニ成立セル法人ニ就テモ亦同様ニ脱稅ノ手段ニ用ヒラルル虞ナキアラズ、此ノ如キ法人ニ在リテハ、假想的平時所得ヲ資本ニ對スル一割ト定ムルガ故ニ、營業收益ニ比シテ割合ニ多額ノ資本トナス場合ニハ、假想的平時所得ハ大トナリ從テ利得額ハ少クナリ、終ニ戰時利得稅ヲ課スルコト能ハサルニ至ルベシ、此ノ虞ハ個人營業組織ヲ會社組織ト改ムル場合ニ最モ甚シ、個人組織ヲ會社組織ニ變更スルコトノ盛ニ行ハレツツアルハ所得稅法ノ缺陷ニ基ケルモノナルガ、我戰時利得稅法モ亦之ヲ促スコトナラン、若シ此弊ヲ豫防セントセハ個人組織ノ變更ニ依テ成立セル法人ニ對シテハ平時ニ於ケル個人組織ノ平均ノ所得ヲ以テ平時事業年度ノ平均所得ト看做スベキ也。

●●●●●
法定收益率

●●●●●●●●●●
 法定收益率ニ就テハ先ヅ如何ナル點ニ於テ之ヲ定ムベキカラ決セサルベカラズ、我國法ハ一割ト定ム、思フニソガ當ヲ得タルモノトスルニハ、戰前ニ於ケル普通收益率ガ此程度ニ在ルコトヲ立證セサルベカラズ、之ヲ立法例ニ徵スルニ、英國ハ個人ノヲ七朱トシ法人ノヲ五朱トス、我國ノ富ノ程度ヨリスレハ、到底英國ト雁行スルコト能ハズ、然レトモ一割ト定ムルハ少シク高キニ失スルモノト云ハサルベカラズ、

次ニ法定收益率ヲ一定ムルコトハ、簡明ヲ期スル上ヨリイヘハ、當ヲ得タルモノナレトモ、實際ノ事情ニハ必スシモ適切ナラズ、現ニ戰時所得ニ非常ノ軒輊アルヲ見レハ、平時所得モ區々ニシテ一ナラザルヲ常トスベシ、是ニ於テ法定收益率ニ等差ヲ設クルノ必要ヲ生ズ、米國ノ立法例ノ如キ即チ是ナリ、即チ米國ニテハ資本金ニ對スル七朱乃至九朱ヲ以テ法定收益率ト爲シ、平時九朱以上ノ收益ヲ舉クルモノニモ九朱ノ收益率ヲ以テ之ヲ算ス、少シク繁ニ失スルノ嫌ナキニアラサレトモ却テ實情ニ適スルモノト謂フベキ也。

二、最後ニ資本金額ノ算定方法ヲ明ニセサルベカラズ、假想的平時所得ノ算定ニハ資本ヲ標準トスルコト前述ブルカ如シ、然ルニ其資本額ノ計算如何ニ依リテハ、或ハ利得金額ヲ大ニスルコトアルベク或ハ小ニスルコトアルベク、税法ノ運用ニ大ナル相違ヲ來スベシ、是レ極テ緊要事ニ屬スルカ故ニ戰時利得税法中ニ之ヲ定ムルヲ穩當トス、然ルニ我法ハ之ヲ勅令ニ讓レリ(第五條三項)

大正七年四月四日勅令第六十四號ヲ以テ公布セラレタル戰時利得稅法施行規則ハ資本金額算定方法ニ關シテ詳細ナル規定ヲ設ケ(第三條)、拂込金額出資金額各種ノ積立金額其他名義ノ何タルヲ問ハス積立金ノ性質ヲ有スル資産金額ヲ以テ悉ク資本金額ト看做シ、尙合資會社又ハ合名會社ニ在リテ借入金アルトキハ其出資金額ヲ超過スル金額ヲモ資本金ト計算ス、只保險會社ニ於ケル保險責任準備金及保險支拂準備金ハ之ヲ除算スルモノトス是ニ由テ之ヲ觀レハ資本金ノ範圍ハ比較的廣ク普通ニ謂フ所ノ會社資本金額トハ非常ノ相違アルヲ知ルベク、寧ロ實際ニ適スルモノト謂ハサルベカラズ。

尙此場合ニ於テ問題トナルハ、繰越缺損金額、プレミアム額、并ニ資本銷却額ヲ如何ニ見ルベキカト云フコト是ナリ。

繰越缺損額ハ他日ノ收益ヲ以テ之ヲ補填セサルベカラズ、故ニ資本金額ヨリ控除スルヲ穩當トス(戰時利得稅法施行規則三條二項)

「プレミアム」ニ就テハ法ハ何等規定スル所ナシ、然レトモ其性質上ヨリ考フルニ、其入リ來ル事業年度ニ於テハ收益ノ一部ヲ爲スモノト見ルベク、其後ノ事業年度ニ於テハ積立金繰越金ト同一視スルコトヲ得ルカ故ニ資本金ト計算セラルベキモノトス、サレハ大正七年後ニ於テ「プレミアム」ヲ得ルモノハ一先ツ利得中ニ加算セラルルカ故ニ利得稅ヲ支拂ハサルベカラス、ソハ政府

委員ノ公言スル所トス、大正七年前ニ既ニ「ブレミアム」ヲ得タルモノハ當ニ利得稅ヲ支拂ハザルノミナラズ、ソガ資本金ニ通算セラレ開戦後増資ト同シ結果ヲ生スルカ爲ニ戰時利得額ヲ減シ、利得稅ヲ少クスルコトニ歸着スベシ、夫ノ「ブレミアム」付増資ヲ行ヘル有名ナル大會社ガ利得稅ヲ免ルルハ之カ爲メノミ、大正七年ノ前後ニ於テ、此ノ如キ相違ヲ來スハ公平ヲ得タルモノト云フベカラズ。

資本銷却金ニ就テハ、法ハ何等規定スル所ナシ、只事ノ性質ヨリスルトキハ在來ノ資本ノ減損セルモノヲ補填スルニ過キサレバ、爲ニ會社ノ實資本ヲ増スモノニアラズシテ却テ減損ヲ豫防スルモノナリ、故ニ資本銷却金ハ之ヲ資本金額中ニ計算スベカラズ、資本銷却金ハ實際固定資本ノ減損スル程度ニ伴フヲ要ス、若シ資本銷却金ガ此程度ニ及ハサルトキハ、其會社ノ基礎ハ危キノミナラズ社會資本ノ減少ヲ來スベク、資本銷却金ガ此程度ヲ過クルトキハソレ丈積立金準備金ノ性質ヲ帶フルコトナルベケレトモ後日ノ變動ニモ備ヘ得ルコトナリテ、會社ノ爲ニモ社會全般ノ爲ニモ之ヲ非難スベカラズ、併シ此場合ニ於テモ大正七年ノ前後ヲ區別スベシ、即チ大正七年前ニ於テ過大ノ資本銷却ヲ爲セルモノハ、實際ニ於テ財産ノ隱匿トナリ法ハ之ヲ資本トシテ通算セサルガ故ニ相當ノ利率ニテ戰時所得ヨリ控除セラルルコトナシ、之ニ反シテ大正七年度ニ於テ過大ノ資本銷却ヲ爲スモノハ、其實際ノ資本減損額ニ超ユル丈ハ純益ヲ不當ニ減シ戰時利得稅

ヲ遁脱スルコトトナルベシ、是レ亦一ノ弊ト謂ハサルベカラズ。

二、個人利得ノ算定

・個人利得ノ計算ハ法人利得ノ計算ト異リ、資本ヲ捉ヘ來テ其利廻ヲ標準トスルコトヲ爲サズ、從テ個人營業ニ於テ資本ノ増減アリトスルモ之ヲ斟酌セズ、法案起草者タル政府委員ハ之カ理由ヲ説明シテ曰ク。

個人ノ資本ノ増加ト云フモノハ法律上カラ之ヲ認定スベキ根據ヲ有ツテ居リマセズ、又實際ニ於テモ、個人ノ資本ノ異動ト云フコトハ頗繁ニ行ヘレル、ノミナラズ、當人自身、營業者自身ガ時ニ隨ツテ増減斟酌スルト云フコトガ御座イマスカラドウモ是ハ一々其資本ノ異動ニ對シテ割合ナ附ケテハイカストノ考ヲ以テマシテ、是ハ規定ハシマセズ。

ト、然レトモ個人利得ト法人利得トノ算定上ニ此ノ如キ差違ヲ認ムルハ正當ナリトスベカラズ、殊ニ開戦後ニ於テ新ニ事業ヲ初メタルモノニ於テハ所謂戰時所得ノ中ヨリ相當ニ平時所得ヲ差引クコトヲ許ササレバ、公平ヲ維持スルコト能ハズ、我法ノ解釋トシテハ此ノ如キ場合ハ平時利得ナキモノト見ザルベカラサルベシ。

平時所得ノ絶無若クハ過小(法ハ千圓未満トス)ナル場合ニハ我法ハ所得金額ノ半額ヲ以テ利得金額ト定ム(戰時利得稅法第六條第三項)、何故ニ戰時所得ノ半額ヲ以テ戰時利得ト看做スカノ理由ハ之ヲ詳ニスルコトヲ得ズ、只認定ト答フルノ外ナカラシ。

個人利得ノ算定ニ關シテハ斯ノ如ク資本ノ異動新事業ノ開始等所得ノ基礎ニ變化ヲ生スルコト

アルモ之ヲ斟酌セズ、從テ假想的の平時所得ヲ推定スルコトナシ、但シ相續財産ノ所得、山林伐採ノ所得ニ關シテハ法ハ特別ノ規定ヲ設ク。

(1) 相續財産ハ相續人ノ所得ニ一ノ財源ヲ加フルモノニシテ、作用ニ於テ資本増加ト相似タル所アリ、サレド資本ノ増加トハ異リ明ニ捕捉スルコトヲ得ベキガ故ニ法ハ之ヲ斟酌シ、相續財産ニ對スル被相續人ノ平時所得ヲ相續人ノ平時所得ト看做ス、(第六條一項但)正當ノ規定ト評セサルベカラズ。

(2) 山林伐採ノ所得ハ年々繰返ヘスモノニアラズ、戰前ニ之ヲ存シテ戰時ニ之ヲ缺クコトアルベク、又戰時ニ之ヲ存シテ戰前ニ之ヲ缺クコトアルベク、又戰時平時ニ之ヲ存スルモ、其伐採ノ程度大ニ異ルコトアルベシ、サレハ戰時所得ト平時所得トヲ比較スルニハ之ヲ斟酌セサルベカラズ、是ニ於テ我法ハ此種ノ所得ガ平時所得中ニ存スルトキハ之ヲ除算シ、大正七年後ノ所謂戰時所得中ニ存スルトキハ戰時ノ山林伐採所得ニ應スル平時ノ山林伐採ノ所得ヲ假想シテ之ヲ平時所得ニ加算スルコトトセリ(戰時利得稅第六條第二項)然ラハ如何ニシテ假想的の平時山林伐採所得ヲ推定スベキカト云フニ、戰時利得稅法施行規則ハ當該竹木ノ大正三年七月中ニ於ケル見積平準價額ヨリ其年分ノ山林伐採所得算出上總收入金額ヨリ控除シタル必要ノ經費ニ相當スルノ金額ヲ控除シテ之ヲ計算スベキヲ定ム(第五條)是レ亦當ヲ得タルモノト謂ハサルベカラズ、只大正三年七月中ニ於

ケル竹木ノ見積平準價格ヲ定ムルコト并ニ之ヨリ控除スベキ竹木伐採ニ關スル必要經費ヲ定ムルコトハ行政官ノ認定ニ屬スルカ故ニ、時ニ不當ノコトナキヲ必スベカラズ。

以上ハ所得税法ニ依リ所得稅ヲ課スベキ個人所得ヲ基礎トシテ利得ヲ計算スルモノナルガ、所得稅ヲ課スベキ所得中ニ計算セラレズシテ而モ戰時利得ト看做ササルベカラサルモノアリ、船舶又ハ鑛業若クハ砂鑛業ニ關スル權利若クハ設備ノ賣却ニ依ル個人ノ利得是ナリ、此利得ニ課スルモノヲ假ニ船舶利得稅鑛業利得稅ト名ケン。蓋シ今回ノ戰爭ニ於テ船舶并ニ鑛物ノ騰貴ハ驚クベキモノアリ、從テ曩ニ船舶又ハ鑛物探掘業ニ關スル設備若クハ權利ヲ買テ後ニ之ヲ他ニ轉賣スルモノハ異常ノ戰時利得ヲ得ベキコト疑ヲ容レズ、故ニ之ニ特ニ戰時利得稅ヲ課スル必要アリト謂ハサルベガラズ、尤モ船舶又ハ探鑛ニ關スル營業ヲ爲スモノガ此種ノ利得ヲ得ルトキハ既ニ所得中ニ加算セラレ、戰時利得ヲ計上スルカ故ニ船舶鑛業利得稅ヲ別ニスルノ要ナシ、從テ特別船舶鑛業利得稅ヲ設クルハ普通所得中ニ加算セラレザル場合タルベキ也。(第七條)

船舶利得稅鑛業利得稅ハ賣却金額ヨリ命令ノ定ムル所ニ依リ算定セラレタル價額ヲ控除シタル金額ニ稅ス、其賣却價額ヨリ控除スベキモノハ、大體ニ所得價額、設備費、改良費并ニ取得賣却ニ關スル必要費ナリトス、大正三年七月三十一日以前ヨリノ其納稅義務者ニ屬スルトキハ取得價額ニ代フルニ同年七月中ニ於ケル見積平準價額ヲ以テス、但シ鑛業又ハ砂鑛業ニ關スル權利ニ就

テハ設備費改良費ヲ缺クコト論スル迄モナシ。(戰時利得稅法施行規則第六條) 是ニ依テ之ヲ觀レハ、船舶利得稅鑛業利得稅ハ明ニ差益稅ノ性質ヲ發揮スルモノト謂ハサルベカラズ。

第五 免稅點

戰時利得稅ハ偶然利得ニ稅スルモノナルガ故ニ苟クモ偶然利得ト認ムベキ戰時利得ダニアラハ、悉ク之ニ課稅スベク遺漏アルベカラサル也、然レトモ其利得ノ小ナルモノハ擔稅力必スシモ大ナラズ、且ツ戰時利得ノ平時所得ニ超過スル額ヲ以テ一應戰時利得ト推定スルモ、其利得ノ小ナルモノニアリテハ必ズシモ偶然利得ノ純ナルモノヲ捕ヘ得ルモノト限ルベカラズ、而モ之ニ稅スルハ經濟界ノ弱者ニ過大ノ負擔ヲ命スルノ危險ナシトセズ、是カ故ニ小利得ハ免稅セサルベカラズ、諸國ノ立法例ヲ按スルニ何レモ免稅點ヲ設ケサルハナシ、我國ノ戰時利得稅法モ亦然リ。

我國ノ戰時利得稅法ニ依レハ個人利得ニシテ三千圓未滿ナルモノハ之ヲ免稅ス、(第六條四項) 船舶利得稅鑛業利得稅亦同シ(第七條一項但)

戰時利得稅法案ニハ所得金額三千圓以下ヲ免ストアリシガ、衆議院ハ之ヲ利得金三千圓未滿ヲ免スト改メリ、現行法ハ即チ是ナリ、所得金三千圓ハ戰時所得ニ外ナラサルガ、之ヨリ平時所得并ニ其二割ヲ控除シテ得ベキ戰時利得ハ比較的低額タルベキナリ、利得金二千圓ハ戰時所得ヨリ

平時所得并ニ其二割ヲ控除シタル殘額ニ過キサレバ、其戰時所得ハ餘程巨額トナルベキ也、是カ故ニ議會ノ修正ハ大ニ免稅點ヲ高メタルモノト謂ハサルベカラズ。

免稅點ヲ高メテ利得金三千圓トシタル結果ハ中産階級以下ニ於テ戰爭ノ間接ノ影響ヲ受ケタルモノハ多ク免稅セラルルコトナレリ、之ヲ農業ニ就テ見ルニ米價ヲ二十五圓トシ一反一石五六斗ノ小作米ヲ得ルモノトシ必要ノ經費ヲ控除シテ計算センニ、三千圓ノ所得額ヲ得ル爲ニハ少クトモ十町以上ノ田ヲ有セサルベカラズ、然ルニ大正元年二年頃ノ米價ヲ二十圓位トシ、姑ク經費ヲ同一トシテ考ヘンニ、三千圓ノ戰時利得金額ヲ得ルカ爲ニハ少クトモ四十町ノ田ヲ有セサルベカラズ、コハ素ヨリ粗雜ナル計算ナレトモ亦以テ所得金ガ利得金ニ改正セラレタル意義ヲ知ルベク免稅點ガ如何ナル階級ニ迄及ヘルカノ一端ヲ窺フニ足ラン。

勝田大藏大臣ハ議會ニ於テ所得金三千圓ト定メタル理由ヲ説テ左ノ如ク云ヘリ。

大正六年度ノ第三種所得稅額ノ表ニ據ルト納稅人員約百二萬三千人許リアル中、千圓以下ノ者七十六萬三千餘人、二千圓以下ノ者十六萬二千餘人、三千圓以下ノ者四千三百餘人、三千圓以上ノモノハ極テ少イ、大體日本ノ國情カラ考ヘマスト、餘リ下ノ多數ノ者ニエライ貢擔ヲ課ケルト云フコトデハナイテハナイカト云フ見當カラ、三千圓ト定メタ次第デアリマス

ト、然レトモ戰時利得稅ヲ納ムル人比較的少シトテ毫モ憂フルニ足ラズ、蓋シ此稅ハ寧ロ莫大ナル偶然利得ヲ得ル少數者ニ課セントスルモノナレハ也、サレハ衆議院ノ修正ハ却テ當ヲ得タルモ

ノト評セサルベカラズ。

第六 稅 率

戰時利得稅ニ適用スル稅率ニ關シテハ二主義アリ、比例稅率主義累進稅率主義是ナリ、戰時利得稅ハ偶然利得ニ課スルモノニシテ其利得ノ大ナルニ連レ率ヲ重クスルモノヲ得タルモノノ痛苦ヲ増スモノニアラザレバ、累進稅率ヲ適用スルコトヲ至當トス、是カ故ニ佛、伊、米、獨、奧、丁、瑞典、諾ノ諸國皆此主義ヲ採ル、比例稅主義ヲ採ルモノハ英國、瑞西等ノ諸國ニシテ極テ例外的ニ之ヲ見ルノミ、我國モ亦實ニ此例外的立法系ニ屬ス。

我法ニ依レハ、法人利得ニハ二割、個人利得ニハ一割五分ヲ以テ稅ス（戰時利得稅法四條、累進稅率主義ヲ採ル國ニアリテハ其最高稅率ハ極テ高ク、佛國ハ最近ノ改正ニ依リ八割ト爲シ、米國ハ六割ト爲シ獨國ハ五割ト爲シ獨國ハ四割半トス、比例稅率主義ヲ採ル國ニ於テモ英國ノ如キハ八割ヲ以テ稅率トス、戰時利得ノ大部ヲ沒收スルモノトモ評シ得ベシ、而モ何レノ國民モ之ニ對シテ異議ヲ唱ヘサルハ、偶々以テ犧牲的精神ノ如何ニ熱烈ナルカヲ證スベシ、我國ノ稅率ハ之ニ比シテ極テ低ク殆ト日ヲ同フシテ談スルコトヲ得ズ。

我國ノ戰時利得稅ノ稅率ハ斯ノ如ク極テ低シ、然ルニモ拘ラズ、人或ハ之ヲ高キニ過クト爲シ

更ニ低クセント努ムルモノアリ、曰ク政府ニシテ大正七年度ニ於テ千八百萬圓大正八年度後ニ於テ三千二百萬圓ヲ得ントスルナラハ、個人利得ニ一割五分法人利得ニ二割ヲ税スルノ要ナケン、何トナレハ此率ヲ以テセハ一億圓以上ノ收入ヲ得ルニ至レバナリト、此說ニ共鳴スルモノハ第四十議會ニ於テ盛ニ政府ヲ窮追シ、戰時利得ニ對シテ二割又ハ一割半ヲ取ルコトヲ主眼トスルカ又ハ三千二百萬圓ノ收入ヲ得ルコトヲ主眼トスルカヲ詰問スルモノ頻出セリ、政府ハ之ニ答ヘテ「臨時事件費歳出入ノ權衡ヲ得サルモノアレハ之ニ適合スルノ法制ヲ作ラサルベカラズ、サレバトテ金額許リヲアテニシテ法制ヲ作ルベキニアラズ二者ハ實際ニ於テ相關聯ヲ爲ス」ト云ヘリ、少シク不得要領ノ嫌ナキ能ハズ、思フニ税率ヲ一割半トシ二割トスルハ固ヨリ獨斷的認定ニ過キスト雖トモ、大正七年度ニ於テ一千八百萬圓其後ニ於テ三千二百萬圓ヲ得ントシテ此税率ヲ定メタルモノニアラサルハ明白ナリ、若シ利得稅ノ收入ガ多クナリ行カバ、多々益々可ナルヲ見シノミ、戰時利得稅ハ臨時稅ナルカ故ニ臨時事件豫備費ノ支辨ニ充ツルコトトセルガ、大正七年度ニ於ケル臨時事件豫備費ハ八千四百萬圓ニ達ス而モ今日不足スルコト少カラズト聞ク、而シテ之ニ對スル收入トシテハ戰時利得稅千八百餘萬圓ノ外ニ雜收入二千三百五十萬圓、前年繰入金二千三十餘萬圓、借入金三千二百萬圓ヲ計上ス、又臨時軍事費ハ三千三百七十餘萬圓ニ豫算セララルモ之ニ充ツベキ軍資金ハ殆ト借入金及公債募集金ニ仰クコトトナレリ、若シ戰時利得稅ニシテ豫算

ニ超過スル巨額ノ收入ヲ齎ラシ來ラン乎、臨時事件豫備費并ニ軍事費支辨ノ爲ニ借入金又ハ公債募集ヲ爲スノ要ナケン、苟モ豫算ヲ一瞥センモノハ、忽チ一千八百餘萬圓ヲ得ルコトヲ主眼トシテ戰時利得稅ヲ起セルモノニアラサルコトヲ悟ルベキ也、而モ是ヲコレ悟ラズ、利得稅ハ一億圓以上ニモ達スベシト豫言シテ政府豫算ノ杜撰ナルコトヲ痛論シテ止マズ、戰時利得稅ノ收入豫算ハ政府ノ辯明セルカ如ク大正五年度ノ實情ヲ基礎トシテ計算シタルモノナレバ、大正六年度ノ實情ヲ基礎トシテ計算スル戰時利得稅ノ收入ハ更ニ大ナルモノトナルヤ必セリ、然レトモ之ヲ以テ稅率ヲ低クスルノ理由ト爲スベカラサル也。

次ニ我法ニ依レハ個人利得ト法人利得トノ間ニ稅率ヲ異ニシ而モ前者ノ率ガ後者ノ率ヨリモ輕シ、是レ所得稅ト全ク反對ノ方向ニ走レルモノナリ、政府委員ハ之カ理由ヲ説明シテ曰ク、法人ハ増資ノ場合ニ假想的平時所得ヲ算定シテ之ヲ控除シ以テ戰時利得ヲ形クルモ個人ハ此斟酌ヲ受クルコトナシ、之ヲ其一トス、又法人ハ資本ヲ運轉シテ利益ヲ得ルモ個人ハ資本ノ外ニ個人ノ勞力ニ依ル所得モアレバ之ヲ輕クセサルベカラス、之ヲ其二トス又所得ヲ算定スルニ際シテモ、法人ニ於テ控除セラルベキ經費ニシテ個人ニ於テ控除セラレサルモノアリ、之ヲ其三トス、三者何レモ法人ニ寬ニシテ個人ニ酷ナルノ嫌アリ、稅率ニ於テ之ヲ矯正セサルベカラズト、此議論一應聽クベシ、然ルニ同一ノ政府委員ハ所得稅ニ於テ個人ニ累進稅ヲ課シ株式會社ニ比例稅ヲ課シ個人

ニ酷ニシテ法人ニ寛ナルノ立法ヲ辯護シテ已マズ、前述ノ三ツノ理由ノ中ニツハ少クトモ所得稅ニ就テ之ヲ云ヒ得サルベカラズ若シ論理ヲ一貫セバ所得稅ニ於テモ個人ニ輕率ヲ課シ法人ニ重稅ヲ課セサルベカラズ、余ハ茲ニ所得稅ヲ論セントスルニアラズ、只我所得稅法ト戰時利得稅法トノ間ニ主義ノ大ニ異レルコトヲ高調セントスルノミ、何レニセヨ、戰時利得稅法ニ於テ個人ヨリモ法人ニ重ク課セルコトハ、我立法ノ新傾向ヲ暗示スルモノトシテ之ヲ歡迎セサルベカラズ。

第七 戰時利得稅法ノ施行期間

戰時利得稅ハ尙早クヨリ之ヲ行ハサルベカラサリシモノナルガ、我國ハ歐洲大戰勃發後四年ニ垂ントスル大正七年四月ニ至テ初テ之ヲ行フニ至レリ、從テ戰時利得稅法ニ於テ戰時ト云フハ大正七年ニ初マル也、尤モ法ハ此點ニ關シ法人ト個人トノ間ニ區別ヲ設ケ本法ハ法人ニ付テハ大正七年一月一日ヲ含ム事業年度分ヨリ、個人ニ付テハ大正七年分ヨリ之ヲ適用スト定ム、是カ故ニ大正三年八月ヨリ大正七年ニ至ル迄ニ得タル戰時利得ニハ之ヲ課セサルコトトナレリ。是レ戰時利得ハ過去ニ於テ頗ル大ナルモノアリシヲ認ムルモ過去ニ溯及スルハ當ヲ得サルモノトシタルガ爲メナラン、然レトモ、溯及ハ全然之ヲ認メサルニアラズ、法人ノ利得ハ大正七年一月一日ヲ含ム事業年度分ヨリ稅ストセバ、事實ニ於テ溯及スルモノアルコトヲ許ササルベカラズ。

今此規定ニ依テ税法實施期ノ運用ヲ見ルニ、大正七年度ノ戰時利得計算ノ基礎タル所得ハ、時期ニ於テ區々トナルベシ、個人所得ニ在リテハ田畑所得ハ大正四、五、六ノ三年ノ平均所得ニ依リ、山林伐採所得ハ大正六年ノソレニ依リ、外國并ニ殖民地ニ於ケル法人ノ配當金ハ大正六年ノソレニ依リ、其他ハ大正七年ノ豫算收入ニ依ル、船舶鑛山ノ賣却利得ハ大正六年ノソレニ依ル、法人ニ在リテハ事業年度ヲ一年トスルモノト半年トスルモノトニ於テ異ル、前者ニ於テハ事業年度ノ大正六年二月ヨリ初マルモノヲ最モ遠ク溯ルモノトシ、後者ニ於テハ事業年度ノ大正六年八月ヨリ初マルモノヲ最モ遠ク溯ルモノトス、我國ニ於ケル會社ハ多ク事業年度ヲ半年トスルモノナルカ故ニ、實際ニ於テハ大正六年八月以降ニ得タル所得ヲ基礎トシテ戰時利得ヲ計算スルコトトナルベキ也。

戰時利得稅ハ戰爭ノ影響ノ存スル限り、之カ爲ニ偶然利得ヲ得ルモノアル限り之ヲ稅スベキモノトス、戰爭終了シテ尙戰爭ノ影響已マサラン乎戰時利得稅ハ之ヲ廢スベカラス、然ルニ我國ノ戰時利得稅法ハ戰爭終了ヲ限界トシテ之ヲ廢スルノ趣旨ニ依リ、「本法ハ法人ニ付フハ講和條約調印ノ日ノ屬スル年ノ末日ヲ含ム事業年度分限り、個人ニ付テハ其年分限り廢止ス」ト定ム。

此廢止期ノ運用ヲ見ルニ、個人所得ニアリテハ田畑所得ハ講和ノ年ノ前三年ノ平均所得ニ依リ山林伐採所得、外國法人殖民地法人ヨリスル配當金ハ講和ノ年ノ前年ノソレニ依リ船舶鑛山利得

モ亦講和ノ年ノ前年ノソレニ依ル、講和ノ年ノ一部ハ明ニ戰爭繼續シ戰爭ノ影響アルニモ拘ラズ之ニ課稅セサルコトトナル也。又法人ニ在リテハ、事業年度ヲ一年トスルモノハ講和ノ年ノ翌年ノ十二月迄ニ及ヒ、事業年度ヲ半年トスルモノハ講和ノ年ノ翌年ノ五月ニ迄及フベシ、我國會社ハ事業年度ヲ半年トスルモノ多キカ故ニ實際ハ講和ノ年ノ翌年ノ五月迄ノ利得ガ課稅セラルルコトナルベシ。

以上述フル所ニ依テ觀レハ戰時利得稅ノ行ハルル期間ハ個人ト法人トノ間ニ非常ナル相違アリ又法人ノ間ニ於テモ一年ヲ事業年度トスルモノト半年ヲ事業年度トスル者ノ間ニ於テ非常ナル相違アリ、事業年度ガ同シク一ケ年若クハ半年ケ年ノモノニアリテモ、其初期終期大ニ異ルヲ見ルベシ、戰爭ノ影響ハ其時期ニ依テ同シカラズ、異レル時期ノ利得ヲ捕フルハ公平ヲ得ルモノト云フヲ得ズ、戰時利得稅法ハ此點ニ關シ不備ノ譏ヲ免ルベカラズ。

第八 結 論

戰時利得稅ハ戰時ノ要求ニ應シテ產マレタルモノニシテ、我租稅史上ノ新記錄ヲ爲スモノナリ證文ノ出シ遲レト云フモノアリト雖トモ、證文ノ出ササルニ優レルコト萬々也、余輩ハ此新立法ヲ衷心ヨリ歡迎スルニ躊躇セズ、然レトモ其稅法ノ内容ニ至リテハ、脫稅ヲ獎勵スルモノアリ不

公平ノ結果ヲ生スルモノアリ、批難ヲ加ヘサルベカラサルモノ少シトセズ、他日之ヲ改正セサルベカラサルナリ。

戰時利得税法ハ戰爭ノ終了ト共ニ之ヲ廢止スルコトナリ居レトモ、戰爭終了スルモ戰爭ノ影響已マズ、縱令戰爭ノ影響已ムニ至ルモ異常ノ利益ヲ得ルモノ極テ多カラシ、故ニ戰爭ノ影響ノ續ク限リ戰時利得税ノ適用ヲ延期シ、戰爭ノ影響已ミタル後ハ戰時利得税ヲ變シテ正常利益超過税トナシ以テ恒久税トナスベキナリ、余輩ハ外國ノ立法カ戰後ニ於テ此方面ニ向テ發展センコトヲ期待ス、我國ノ租税立法者ハ此世運ノ進展ヲ洞觀シ、之ニ應シテ此税法ヲ改造スルコトニ努力セサルベカラサルナリ。